

(^_^)v 趣味に生きる (第41回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

ドイツに魅せられて

塩崎尚子

(パナソニック健康保険組合 松下記念病院)

◆はじめに

本シリーズ『趣味に生きる』に好きなドイツのことを書きませんか？ と入社以来の友人から投稿のお話を頂きました。彼は大の城好きで語り始めたら止まらない、投稿原稿を書き始め

ても止まらない。その姿を見て、好きなことを書けばいいのね OK！ と引き受けたものの、いざ書くとすると難しいものです。読者の皆様に少しでもドイツの魅力を知って頂ければと思います。

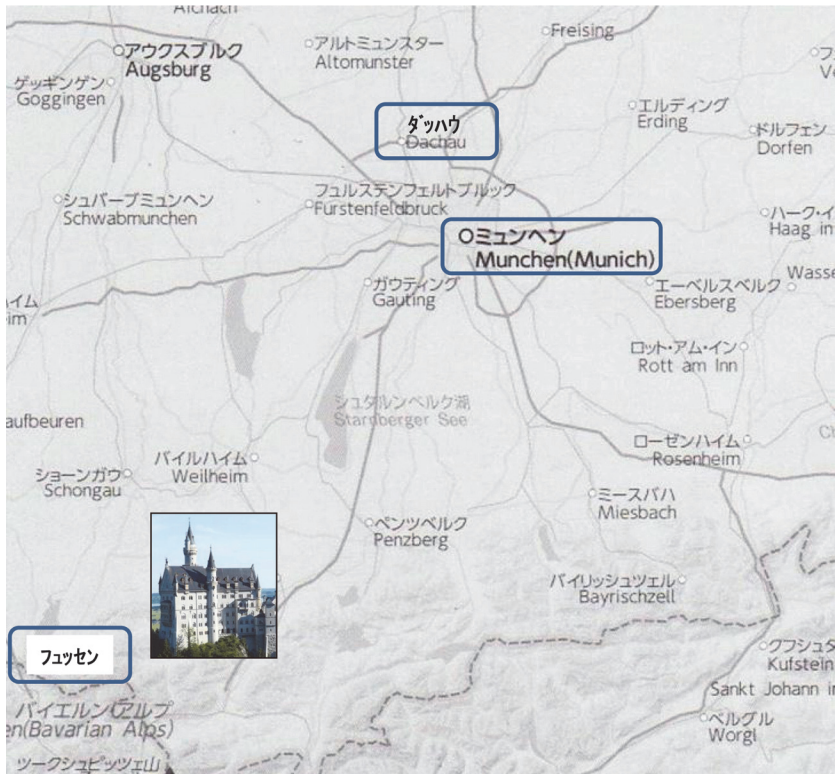


写真1 ミュンヘン近郊地図

◆ドイツ語

読者の方の多くは医療関係者かと思います。近年は医療系学生でも第二外国語が選択性と聞きますが、ベテランと呼ばれる年齢の方は第二外国語と言えばドイツ語に決まっていたのではないのでしょうか。現在もHb(ヘモグロビン)を「ハーバー」と言う医師が少ないながらおられますね。しかし、患者＝「クランケ」はもはや絶滅危惧種、往年のテレビドラマでしか聞くことが無くなり、誰もが知る「カルテ」は既にドイツ語から独り立ち。さらに電子カルテ化が進み「シャウカステン(直訳＝観察箱、レントゲン写真等を見るディスプレイ機器)」も風前の灯でドイツ好きには寂しくなりました。

ドイツ語の名誉のために、ドイツ語が実はさりげなく頑張っている分野の一つをご紹介します。「ヒュッテ(山小屋)」、「リュックサック(直訳＝背中袋)」、「アイゼン&ピッケル(雪山用の靴&氷斧)」…などの登山用語は、語源がドイツ語だと自己主張することなく日本に溶け込んでいます。山の雑誌で目にする「モルゲンロート」は直訳すると「朝の赤」ですが、朝陽を受けた涸沢カールは本当に素晴らしく、やはりここはカタカナで「モルゲンロート」が似合うと思うのです。

さて私は何年ドイツ語を習っているのだろう…改めて振り返ってみると、途中で休みを

はさんでかれこれ20年。ところがクラスは未だに初級レベルを行ったり来たりしています。春には大勢いたクラスメイトが夏に一人減り、秋に二人減りし、そしてついにクラスは翌々春頃には残念な状況に…を繰り返します。そんなことあるある！と膝を打った方がおられるはずですね。しかし、年度が明け新学期にまた初級に戻ると楽しいこともあります。秋からの留学に備えて毎年高校1年生が数名加わるのです。

「友達になってください、はドイツ語でなんと言いますか？」なんて可愛い質問をしている彼らの中から、数年後にはブンデスリーグで大活躍する選手が出るかもしれません。

成人のクラスメイトにはドイツへ様々な修行に向かうために取り敢えず挨拶ができるようになりたい人がおられます。整形外科医、また整形外科分野の靴を専門に作りたい人(ちなみに製靴業は「シューマッハー」さん)、ケーキ職人さん…夢を追う人たちに刺激されることが語学の楽しみの一つでもあります。そんな新しい息吹に触れるとともに、一方では20年来のクラスメイトとドイツ語抜きのピアホール文化交流を続けています。20年前の初心者クラスの講師のお名前を冠して『ミルナー会』。オーストリア人のミルナー先生、奥様の住むポルトガルに行かれ如何お過ごしでしょうか。先生の撒いた文化の種は日本で立派に育って根付き、ドイツビールの消費に一役も二役も買っています。



写真2 モルゲンロート(涸沢カール)



写真3 バンペルクの修道院にある醸造所

◆ドイツへ

外国語を習うとその言葉を使える国に行きたくなるのが人情。ドイツ語を習えばドイツに行かねばなるまい…ということで幾度かドイツへ旅をしました。今では観光ガイドブックはもとより、インターネットで都市やアクセス情報が瞬時にかつ大量に得られます。また優れた紀行文も沢山あります。本コラム寄稿前に『ドイツ四季暦(池内紀著)』を読み返すうちに、心は既に機上から石畳を歩きドナウの河畔へ向かうかのようでした。素晴らしい文は専門家にお任せして、私はごく普通の日本人が旅先のドイツで体験したできごとや出会った人々について書いてみたいと思います。

◆空港にて

初めての海外一人旅はミュンヘンに留学中の『ミルナー会』会員を訪ねるものでした。一人旅は気楽な半面、不安と不自由が付きものです。

フランクフルト空港に降り立ち、まずトイレの入り口でスーツケースをどうしたものかと悩みました。ここで待っているように、とスーツケースに言い聞かせて用を済ませて戻り、元の位置にあったスーツケースを見たときの何とも言えない安堵感。驚いたことに某外国人の方は個室前までスーツケースを運びドアを開けたままで用を足されていました。国民性の違いもありますがそれが世界の常識かもしれません。私の置きっぱなしはやはり危険でしたね。

◆インフォメーションにて

ミュンヘンは日本人観光客に人気が高いバイエルン州の州都です。ある年齢層の方々にはかつてビール造りの盛んな北緯 43 度線付近の都市「ミュンヘン、札幌、ミルウォーキー」の宣伝文句でミュンヘンは美味しいビールと直結する回路が出来あがっていることでしょう。この地で開催される世界最大規模の「オクトーバー



写真4 「ユーロ」発足(2002年1月1日)まで
60日7時間44分26秒、ボールにカウントダウン中



写真5 ミュンヘン新市庁舎(20世紀初頭完成)

フェスト」はただただひたすらビールを飲む祭典ですが、近頃は日本でも「〇〇オクトーバーフェスト」と銘打った企画を数多く目にします。ビール好きの私は大阪で「Prosit! (健康を祝して乾杯!)」できる幸せに酔っています。ミュンヘンはまた文化の街で多くの大学や美術館、州立オペラ座などがあります。観光案内所で観劇のお薦めを尋ねようと多くの旅行者の後方に並んで、拙いドイツ語での質問を頭の中で繰り返しながら順番を待ちました。いよいよ自分の番になり質問をしたところ、返ってきたのは「イッヒ カン ニヒト フェアステーエン…あなたの言っていることが分からないわ」。それだけは聞き取れたので赤面しながら早々に案内所を後にしました。見上げれば仕掛け時計で有名なミュンヘンの新市庁舎。大勢の観光客の中で、こんなときは、「いややわあ、あんたの言うてること分からへん言われたわ。」と相方の肩でも叩きながら大阪弁で笑い合いたい気分でした。

◆オペラ座にて

その後、留学中の友人の手配でオペラ座に行くことができました。料金は舞台から離れるほど安価で、最上階なら学生たちでも足を運べるように設定されています。最上階とはいえオペ

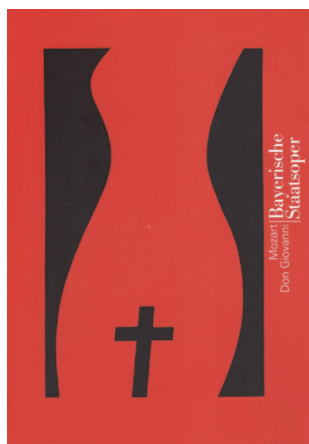


写真6 オペラ座のパフレット
モーツァルト「ドン・ジョヴァニ」

ラ座、と日本から持参したワンピースを着ていそいそと出かけ、階段を幾らか上がったところで執事風のおじさまに席を尋ねると「ガンツ、ガンツ、ガンツ、オーベン…ずっとずっとずっと上」。そりやお安い席ですけど何もそんなに「ガンツ」を強調しなくても。無事に最上階で座席を探すと、そこはちゃんと手すりに番号が振ってある立ち見席。隣にいた若い女性が私のパンフレットを指しながら「ダーフ イッヒ? ちょっと見せてくださる?」。聞けば彼女はアメリカから英語講師としてドイツに滞在中で、「この席は最高よね! 立見席値段で座れちゃうの!」といいながら、本来は背もたれ用のバーに飛び乗りました。もちろん私も真似をしてピョン。折角のワンピースにはかわいそうなことをしましたが、お金は無いけど夢がある若者たちに囲まれてとても幸せな時間でした。

◆インビスタンドにて

ドイツにはインビス(軽食)のスタンドが沢山あります。毎日レストランの食事では胃が重いという場合や旅の途中の虫養い(注:京ことば。一時的に空腹を紛らわすこと)にとっても助かります。駅構内のピザインビスでのこと。ご存知のようにドイツはエコ先進国として有名です。過剰包装や土産用の小袋などの発想はなく、持ち帰りピザも紙に包んでそのまま渡されるので「袋に入れて欲しい」と言ってみました。このとき「袋」という単語を思い出したい私の頭の中で、袋⇒パックする⇒分子形は語頭 ge をつける、連想は「ゲペック」と言う単語に辿りつきました。ところがインビスのお兄さんはピザを渡しながら「ハーハッハッハッ… ヒーヒー、ゲペック、ゲーペック」と大爆笑。どうやら何かとんでもないことを言ったらしい。ホテルに戻り大急ぎで辞書を引くと“ゲペック”=旅行鞆。「そのピザをスーツケースに入れてちょうだい」は確かに笑えます。でも、お兄さん、そんなに笑わなくてもよかったんじゃないかしら。ちょっぴり悲しい味のピザ。ちなみに紙袋は「トゥーテ」でした。



写真7 果実商



写真8 ノイシュバンシュタイン城

◆フュッセン

父とドイツを再訪しました。ドイツ人の友人に国内の移動手段を尋ねると即座に「ミットデム ツーク！・・・電車で！」。そこで「ノイシュバンシュタイン城」への拠点として有名なロマンチック街道の終点フュッセンを電車で訪ねました。ミュンヘンからの車内で韓国人の学生カップルが相席になりました。彼がミリタリーサービス(兵役)を終えたので、ドイツ在住の彼女の両親と一緒に訪ねる旅行中でした。彼は英語は得意ですがドイツ語は少し、彼女は英語

もドイツ語も堪能、私は英語もドイツ語も少し、父は日本語と笑顔あるのみというおかしな組み合わせでしたが、英語もドイツ語も母国語としない者同士だと不思議と会話が成り立つのですね。私が「マイ ファーザー イズ セブンティードライ イヤーズ オールド」と言うとき??の後、「オー、セブンティースリー！」と爆笑。「ドライ」だけドイツ語といった無茶苦茶などちゃ混ぜ語でしたが、楽しくおしゃべりしようと思えば何とかなるものだという変な自信を彼らからもりました。



写真9 ベルリン市内の電車

◆ダッハウ

ダッハウはミュンヘンの北西、都市部と郊外を結ぶ電車「S バーン(JR〇〇線のような路線)」で通える距離の緑豊かで閑静な住宅街です。この街には1933年に造られた強制収容所跡があり、平和について考える人々が国内外から訪れます。収容所跡から駅へ向かうバス内で高齢の尼僧に「どちらから？」と声をかけられました。日本から来たことを告げると、若い頃に教会の仕事で東京に行ったことを懐かしそうに話され、父を労わる言葉をかけて下さいました。途中でバスを降りた彼女の背中はとても穏やかで、しかし威厳に満ちて見えました。暖かい気持ちで帰路の電車を待つ私達に今度はいかついお兄さんから「どこへ行くんだい？」と声がかかりました。Tシャツから伸びた浅黒い腕が丸太のようで、ちょっと引き気味になりながら「ミュ、ミュンヘン・・・」と答えると、「向こうのホーム

だよ」。どこから見ても旅行者の父娘がさらに郊外方面へ向かうホームにたたずんでいるので親切に教えてくれたのでした。

戦争は人間をこれほどまで冷酷にするという強制収容所跡での体験は今も深く心に残っています。そして、この街でとても優しい人に出会えたこともまた忘れられない思い出となりました。

◆おわりに

ドイツでの失敗談、人々との出会いをとりとめもなく書かせて頂きました。写真集ではなく実際に目にした風景、訪ねた土地でもらった親切がその国を好きにさせてくれます。若者もそれなりの人も旅に出て、ドイツだけでなく他の国々を好きになることを願って稿を終えたいと思います。

さて、私はまたドイツに行きたくくなりました。

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思います。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。